

# 発達障害のある子どもを育てる母親の感情体験とその語り

## ：感情労働の視点からの臨床心理学的考察

佐藤 直子      お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

### 要約

本研究は、発達障害のある子どもの母親が、子どもを養育する中で、どのような感情を体験しているのか、さらに、自己の感情をどのようにコントロールしているのかを明らかにし、「感情労働」の視点から考察する事を目的とした。発達障害のある子どもを育てる母親 15 名を対象に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく質的分析を行った結果、自身の感情をコントロールしながら子どもに関わる母親の感情体験プロセスが示された。子どものやる気を引き出すため、子どもの安定を促すためにと、母親は、自分の感情を抑えて、子どもにとって望ましい感情を表出するよう努力している。また、子育てに、自分にとってどんな意味があるのか、と意味づけをすることで、自分の気持ちを奮い立たせて子育てに向き合っている様子が見られた。これらのプロセスから、発達障害のある子どもを育てる母親の感情労働の様相が示された。

**キー・ワード**：発達障害、母親、感情労働、質的研究

### I 問題と目的

近年、発達障害への理解が進み、発達障害のある子どもへの対応として、SST、療育、教育支援など、様々な取り組みが行われている。また、親自身が支援を受ける対象であるという認識も広まっている(篁, 2012)。発達障害のある子どもを育てる母親は、子どもが様々な行動上の問題を起こすことによる日常生活での育児負担のみならず、障害の受容、将来の不安、自責感などが原因でストレスが高まり、うつ状態に陥ることが多い(野邑他, 2010)。さらに、発達障害のある子どもは、感情や行動のコントロールの難しさを特性として持っているため、発達障害のある子どもを育てる母親は、子どもとの安定した関係性を育み、安定を維持するために、日々、自分の感情を抑制し、感情をコントロールする事が必要とされていると

考えられる。

社会学者である Hochschild は、肉体労働、頭脳労働と並ぶ第3の労働として「感情労働」という概念を提唱した。感情労働とは、「相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の感情を促進させたり、抑制したりしながら、自分の外見を維持することを要求する労働である」と定義されている(Hochschild, 1983 石川・室伏訳 2000)。これまでの感情労働に関連した研究の多くは、感情の抑制や忍耐が必要な看護職や介護職などの専門職を対象にしたものであるが、感情労働の理論的枠組を家庭内での感情コントロールに適用することが可能であるという指摘がある(Erickson, 1993)。子育ては、看護職や介護職のように職業として報酬を得られる労働とは異なる。しかし、子育ては「無償労働」という言葉に表さ

れるように、生きること、生活そのものを支える重要な役割をもつ「労働」である。そして、様々な感情にさらされながらも、「相手=子ども」のなかに、適切な心理状態を作り出すために自らの感情をコントロールしている、発達障害のある子どもを育てる母親には「感情労働」の概念が当てはまるのではないだろうかと考える。

発達障害のある子どもを育てる母親についての心理社会的な研究の中で、母親の感情体験についての実証的な研究は未だ不十分である。発達障害のある子どもを育てる母親の感情体験、そして様々な感情を抱えながら子育てをするという営みは、「母親であれば子どもを育てるのは当然のこと」という社会通念により見過ごされてきたのではないだろうか。発達障害のある子どもを育てる母親は、子どもへの関わりのみならず、子どもの将来に向けた取り組みとして、社会制度を取り入れたり、子どもが安定した状態で生活できるための環境調整など、やるべき役割、仕事を多く抱えている。その大きな役割を担う母親が、心身の健康を損ない、心のバランスを崩してしまうことは、子どもが安心して生きられる環境を失うことにもなりかねない。

そこで、本研究では、発達障害のある子どもを育てる母親が、子どもを養育する中で、どのような感情を体験しているのか、そして自己の感情をどのようにコントロールしながら日々の育児を行っているのかを明らかにすることを目的とする。そして、「感情労働」の視点から考察することで、子どもにとっての最大の支援者である母親の感情体験を理解し、発達障害のある子どもを育てる母親への支援につながる知見を得る事を目指す。

## II 方法

### 1. 調査協力者と調査手続き

調査協力者は発達障害のある子どもを育てる母親15名で、年齢は36～47歳（平均41.3歳）であった。母親のうち6名が調査時に就業しており、

勤務形態は5名がパート、1名が常勤（自営）であった。子どもは皆、医療機関にて発達障害の診断を受けている。インタビュー時の子どもの年齢は5～10歳（平均8.1歳）で、性別は男児11名、女児5名であった。在籍は、特別支援学校に在籍する子どもが4名、特別支援学級に在籍する子どもが6名、通常学級に在籍する子どもが4名（うち、通級を利用している子どもは2名）、幼稚園に在籍する子どもが2名であった。協力者15名のうち、8名の子どもにきょうだいがいた。

データ収集期間は、2018年9月から11月であった。研究倫理に関しては、2018年6月にお茶の水女子大学人文社会科学研究所倫理審査会に倫理審査を申請、同年7月に承認を得た。インタビューを受けることへの心理的負担への配慮として、調査の目的、内容、所要時間等について事前に書面および口頭で説明し、承諾を得た上でインタビューを行った。面接内容は、調査協力者の承諾を得てICレコーダーに録音した。

### 2. 調査内容

研究目的に則り先行研究の知見や筆者の関心事に基づいてインタビューガイドを設定し、1時間から1時間半程度の半構造化インタビューを行った。インタビューでは、子育てでの印象的なエピソード、子育てで困難を感じる時の感情や心の動き、子育てで感じる喜びや嬉しさ、支援について尋ねた。協力者の自発的な語りを尊重し、その語りの中で重要だと思われるところを詳しく聴くことに留意しながらインタビューを行った。

### 3. 分析方法

本研究では、木下（2003）の提唱した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach；以下、M-GTAと略記）を分析方法として用いた。M-GTAは、1960年代にGlaser & Straussによって考案されたオリジナル版のグラウンデッド・セオリー・アプロ

一稿の検討から、その可能性を実践しやすいように改良された質的研究法である。M-GTA では、データから分析の最小単位である概念、概念の集合体であるカテゴリーを生成し、カテゴリー間の関係を統合して、対象である事象を説明する図式としての理論をまとめあげていく。具体的な手順としては、まず逐語記録を読みながら分析テーマに関連がありそうな部分に着目し、それを一つの具体例とする概念を生成する。概念は、概念名、定義、具体例により構成される。具体例がその後の分析の中で増えていけば、この概念の説明力は高いと判断される。また、同時に、類似例や対極例などを比較検討することで、解釈が恣意的に偏って進む危険性を防ぐ。こうして類似した概念を一つのカテゴリーとしてまとめ、これら複数のカテゴリー間の関係を統合して理論をまとめていく。なお、分析の過程で指導教員および修士課程ゼミ生数名から数回にわたり妥当性検討の機会を得、データの妥当性を高められるように努めた。

### III 結果

#### 1. 母親の感情体験

分析の結果、8のカテゴリー、27のサブカテゴリー、85の概念が生成された。最終的なカテゴリーと概念を表1に示す。カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは《 》で示した。以下に、カテゴリーを中心にその内容を説明するとともに、カテゴリー間の関連について解説を加える。

##### 1) 【子どもの未来を願う】

このカテゴリーは、《生き抜く力をつけさせたい》、《愛し、愛される人生を得て欲しい》、《ひとりではない、と日々感じられる》の3つのサブカテゴリーから成る。これは、母親が日々の子育てへ向かう原動力であり支えとなる思いを表すカテゴリーである。母親が日々、周囲や家族からの支えを感じ、ひとりではないと感じながら、親亡き後に子どもができる限り自立して、豊かな人生を生きていけるようにと願い、信じる思いを示

している。母親は、子どもにこの世の中を生き抜く力をつけさせたいと願うとともに、子どもが他者に受け入れられ可愛がられながら生きて欲しい、そして、大事な人を愛し、愛される人生を得て欲しいと願っていた。

##### 2) 【のしかかる負担に苦しむ】

このカテゴリーは、《子どもへの苛立ち》、《心が休まらない》、《周囲への気苦労》、《十分な支援が得られない》の4つのサブカテゴリーから成る。これは、十分な支援が受けられない現実の中、子どもとの関わりや周囲への気苦労などの負担が母親に重くのしかかり、母親が苦悩している様子を表すカテゴリーである。母親は、子どもがルールを守れず我慢ができない様子や、理解力がないことによる子どもの振る舞い、行動に対し苛立ちを経験していた。そして、日々、子どもの対応に追われ、何が起こるか分からない状況の中、子どもと離れている時も子どもを気かけ、緊張感が続き、心が休まらない日々を送っていた。また、親族の理解を得る難しさを感じたり、周囲の迷惑にならないように配慮し、周囲の目を気にして取り繕ったりと周囲への気苦労も感じていた。この負担の大きい状況の中、納得いく診断、支援を求めて奮闘するが、十分な支援を得ることに困難を感じていた。

##### 3) 【喪失の痛みを抱える】

このカテゴリーは、《こうあって欲しかった子ども像、家族像、未来を失う悲しみ》、《こうあったかった母親像の喪失》の2つのサブカテゴリーから成る。これは、母親が子どもの障害を受容しながらも抱え続ける悲しみ、心の痛みを表すカテゴリーであり、母親が、思い描いていた子ども像や、子どもとの日々と現実とのギャップを感じ、内心に対象喪失という深い悲しみを抱えていることを示している。母親は、思い描いていた子育てとのギャップを感じたり、他児との成長の違いに落胆し、我が子が障害児であることを認識させられたりする経験から、思い描いていた子どもとの

表1 生成された概念とカテゴリー

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈概念〉
【子どもの未来を願う】	《生き抜く力をつけさせたい》	能力を高める
		仕事につける力
		感情を持ち運ぶ力
	《愛し、愛される人生を得て欲しい》	楽しく生きられる
		多くの人から愛される子でいてほしい
		子どもにとって心地よい環境を望む
	《ひとりではない、と日々感じられる》	誰かを愛する力をつける
		子どもを受け入れてくれる居場所がある安心感
		信頼できる専門家の存在に支えられる
同じ境遇の母親とのつながりに支えられる		
【のしかかる負担に苦しむ】	《子どもへの苛立ち》	ルールを守れない
		理解力がない
		我慢ができない
	《心が休まらない》	子どもの対応に追われる日々
		子どもを常に気にかけて気が抜けない
	《周囲への気苦労》	何が起ころるか分からない
		親族に理解してもらい難しさを感じる
		公共の場で迷惑にならないよう配慮する
	《十分な支援が得られない》	周囲の目を気にして自分を取り繕う
		情報が少ない
支援を得ることの苦労		
【喪失の痛みを抱える】	《こうあって欲しかった子ども像, 家族像, 未来を失う悲しみ》	納得いく診断, 支援を求める
		思い描いていた子育てとのギャップを感じ落胆する
		他児との成長の違いに落胆する
	《こうありたかった母親像の喪失》	障害児であることを認識させられる
		子どもとの関わりを振り返り後悔する
【自分の感情をコントロール出来ない】	《精神の不調を感じる》	私の人生はこんなはずではなかった感
		他者を羨む
		うつ
		不安
		孤独
	《疲労困憊に陥り余裕がなくなる》	絶望
		挫折
		ストレスが身体に出る
		子どもから目が離せない
	《子どもに感情的になってしまう》	親族でも子どもの危険行為への理解がないため任せられない
		命がけで子どもに対応する
		疲弊する
		自分の感情を抑えられない
《夫に感情をぶつけてしまう》	望ましい対応を分かっているのに感情的になってしまう	
	ネガティブな感情を隠しきれない	
	感情的に怒ってしまった自分を責める	
【自分のコンディションを整える】	《母である自分から離れる》	夫に感情をぶつける
		自分の好きな事でストレスを発散する
		子どもと物理的に距離を取る
	《心身を整える》	仕事で別の自分になる
		睡眠をしっかりととり身体を休める
		自分の気持ちを話し、聞いてもらいすっきりする
		自分の気持ちを書き出すことで気持ちの整理ができる

【我が子に合った子育てを学ぶ】	《世の中のルールを教える》	療育での教えを家庭で実践する 子どもを分析し、行動問題の変容を目指す
	《子どもの育ちの目標値》	専門家のアセスメントで見通しが持てる 子育ての方針が決まる
	《子どもの安定を促す関わり》	特性理解からの子ども理解 伝わりやすい方法でのコミュニケーション
【自分の感情をコントロールしながら子どもに対応する】	《自分にとっての子育ての意味》	試練 修行 仕事 母としての責務
	《自分の気持ちをポジティブに切り替える》	自分を肯定する ポジティブを心がける 子どものためにできる事をしようと思う 落ち込んだ気持ちを切り替える 子どものために明るく振る舞う
	《自分の感情を抑えて子どもに対応する》	苛立ちを抑えて子どもに対応する 言いたい事を抑える 子どもを責めたい思いを呑み込む
	《内心の思いを隠して子どもに望ましい対応をする》	内心の思いに関わらず子どもに適切な行動を取ろうとする 子どもに苛立ちを気づかれないように気遣う 落ち着いて冷静に対応しようとする 子どもに合わせざるを得ない
	《子育てが楽になったと感じる》	子どもとのコミュニケーションがスムーズになる 時間に余裕ができる
	《子どもに余裕を持って対応出来るようになる》	子どもとの関わりの積み重ねで自分の感情への対処の仕方を学ぶ ちょっとしたことで感激できる 子どもに鍛えられ忍耐力がつく 子どもに対応できるようになる
【変化する喜びを感じる】	《母としての自尊心がよみがえる》	積み重ねてきた成果を感じ嬉しく思う 頑張りを認めてもらえて嬉しい 子どもとつながれる喜びを感じる
	《子どもの学習能力がつく》	子どもの成長を感じられる 努力ができる 子どもが出来ることが増えて嬉しい
	《心が育まれ優しい子になる》	人の痛みが理解できるようになる 健やかに育つ

日々が得られないことを実感し、折に触れその痛みを感じていた。また、子どもとの関わりを振り返り後悔したり、自分の人生はこんなはずではなかったと他者を羨んだりすることもあり、こうありたいと思っていた母としての自己像を喪失する痛み、悲しみを抱えていた。

#### 4) 【自分の感情をコントロール出来ない】

このカテゴリは、「精神の不調を感じる」、「疲労困憊に陥り余裕がなくなる」、「子どもに感情的になってしまう」、「夫に感情をぶつけてしまう」の4つのサブカテゴリから成る。これは、母親が心身ともに疲れ果て、感情をコントロールする余裕がなくなり、子どもや夫に感情をぶつけてしまう様子や、母親が心身に不調をきたしてい

る様子を表すカテゴリである。母親は、子育ての負担が大きい日々の中で、精神的にも身体的にも症状が出て、疲弊し、追い詰められ心が折れそうになる危機的状態にあった。母親は、子どもに全力に関わる日々で疲労困憊に陥り、子どもの行動や様子に対し、自分の感情を抑えて冷静に対応しようと思っているが、余裕のなさや自分のコンディションの乱れなどで感情を抑えきれない事があった。

#### 5) 【自分のコンディションを整える】

このカテゴリは、「母である自分から離れる」、「心身を整える」の2つのサブカテゴリから成る。これは、母親が日々の子育てに向かうために、自分の心身を整える工夫をしながら日々を送って

いることを示すカテゴリーである。母親は、自分が好きなことをしたり、仕事をする事で別の役割になったりと、子どもから離れる時間を持つなどして心のバランスをとっていた。また、しっかり睡眠をとったり、他者に自分の気持ちを話し、聞いてもらったりすることや、自分の気持ちを書き出して気持ちの整理をしたりすることで自分の状態を把握し、コンディションを整えていた。

#### 6) 【我が子に合った子育てを学ぶ】

このカテゴリーは、《世の中のルールを教える》、《子どもの育ちの目標値》、《子どもの安定を促す関わり》の3つのサブカテゴリーから成る。これは、子どもの育ちのために、子どもにあった子育てを学ぶことを表すカテゴリーである。母親は、療育での教えや、専門家からの学びを家庭で実践し、療育的な視点を持ちながら子どもに対応することで、子どもに現実原則を教えていた。そして、専門家の教えを取り入れて、客観的視点を持てるようになり、子育てに見通しが持てるようになっていた。また、母親は、子どもの安定を促す効果的な関わりを求めて自ら知識をつけ、実践していた。

#### 7) 【自分の感情をコントロールしながら子どもに対応する】

このカテゴリーは、《自分にとっての子育ての意味》、《自分の気持ちをポジティブに切り替える》、《自分の感情を抑えて子どもに対応する》、《内心の思いを隠して子どもに望ましい対応をする》の4つのサブカテゴリーから成る。これは、母親が、子どもとの関わりの中で自然に沸き起こる感情をそのまま子どもに出さないよう、自分の子育てに意味づけをしたり、子どもの安定につながるように、心の内に抱く感情とは違う感情表出をしたりと、自らの感情をコントロールしながら子どもに対応している事を示している。母親は、困難の多い子育てに、自分にとっての意味を見出して、我が子を育てることを受け入れようとしたり、日々続いていく子育てに対して、自分の気持

ちを前向きにしようと心がけ、気持ちを切り替えようとしたりしていた。また、感情を抑えて子どもに対応したり、自身の心の内に抱く思いに関わらず、子ども優先の対応をしようと努力していた。

#### 8) 【変化する喜びを感じる】

このカテゴリーは、《子育てが楽になったと感じる》、《子どもに余裕を持って対応出来るようになる》、《母としての自尊心がよみがえる》、《子どもの学習能力がつく》、《心が育まれ優しい子になる》、の5つのカテゴリーから成る。これは、母親が子どもの成長、変化を感じ、子どもと歩んできた日々、積み重ねてきた関わりの実感し嬉しく思っている事を表すカテゴリーである。母親は、自分の子どもへの関わりや、子どもの成長によって、子どもとの関係がスムーズになったと感じていた。また、その事により生活に余裕を持てるようになり、子どもへの対応力がついていった。そして、子どもの成長、変化を感じる事で、自分の子どもへの関わり、子育てに自信を持ち、母としての自尊心がよみがえり、子どもの心が育まれていることを実感して嬉しく感じていた。

## 2. ストーリーラインと結果図

図1に結果図を示す。

発達障害のある子どもを育てる母親は、【子どもの未来を願い】、子どもの特性から生じる困難の多い子育てを、日々懸命に営んでいる。母親の根底にある思いは、親亡き後も生きていけるよう《生き抜く力をつけさせたい》、そして《愛し、愛される人生を得て欲しい》という願いである。この二つの思いは、願いであり、出来る限りのことをして実現させたい目標ともなっている。この二つの思いと共に、母親が《ひとりではない、と日々感じられること》が、子育てに向かう原動力になっている。そのことに守られながら母親は【のしかかる負担に苦しみ】ながらも、子どもと共に生き抜いている。母親は、子どもから目が離せず、子どもの対応に追われ《心が休まらない》日々を

送っている。その日々の中で《子どもへの苛立ち》を感じることも多く、また、子どもに対しての苦労のみならず、子どもが周囲にどう思われるかを気にしたり、子どもが迷惑をかけないように気遣ったりと、《周囲への気苦労》もある。また、子育ての負担が母親に重くのしかかる背景として《十分な支援が得られない》という現実がある。この、負担が重くのしかかる日々により、母親は、【自分の感情をコントロール出来ない】状態になる。自分の感情を抑えられず、《子どもに感情的になってしまう》ことや、《夫に感情をぶつけてしまう》こともある。そして、感情的になってしまった自分、怒りすぎてしまった自分を責め、後悔する。さらに、ストレスから《精神の不調を感じ》たり、《疲労困憊に陥り余裕がなくなったり》する。一方で、母親が、処理できない、抑えきれない【喪失の痛みを抱え】ていることも、感情をコントロール出来ない要因となる。母親は、《こうあって欲しかった子ども像、家族像、未来を失う悲しみ》、《こうありたかった母親像の喪失》という深い悲しみ、切なさを抱えている。この思いは、隠しきれものでも、コントロール出来るもので

もない。その思いを自分の内に抱えながら、それを表に出さないようにと努力しながら子育てを継続していく母親には、大きな心理的負荷がかかっている。

しかし、母親は、心身に不調を来しても、子どもの安定、安全を守ってもらえると信頼して子どもを託せる存在のなさから、子どもを庇護する母としての役割を自身で担っていかねばならない。母親は、【自分のコンディションを整える】方法として、自分の好きなことでストレスを解消したり、仕事で別の役割になったり、《母である自分から離れる》時間を取ったり、ひたすら眠ることで身体のコンディションを整えたり、また、自分の気持ちを書いたり、話したりすることで気持ちの整理をするなど、《心身を整える》方法を見出している。自分の心身のコンディションを整えながら、自分を奮い立たせて、日々を送っているのである。

この困難多き日々希望を見出す糧となるのは、我が子の成長である。そして、この希望につながる試みが【我が子に合った子育てを学ぶ】ことである。母親は、療育を取り入れ、子どもが社会の

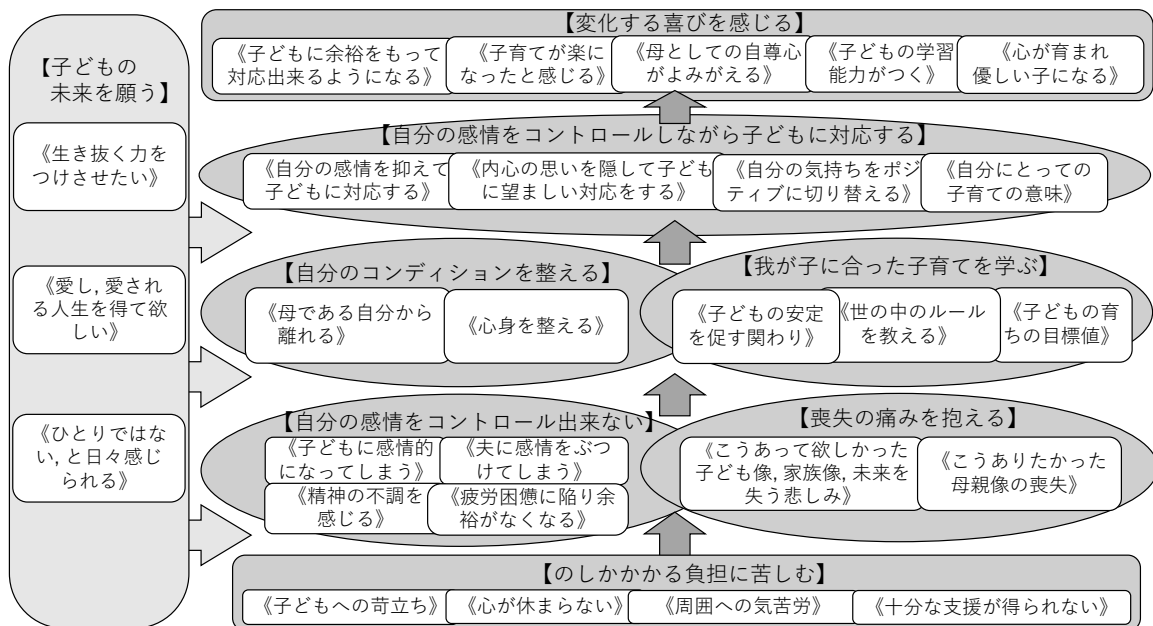


図 1 発達障害のある子どもを育てる母親の感情体験のプロセス、→：気持ちの動き

一員として、他者とつながりながら生きていくために必要な《世の中のルールを教える》。また、専門家の見立て、アドバイスから《子どもの育ちの目標値》が定まる。母親は、この目標値によって、子どもの未来を思い描く事が出来るようになる。未来が見えることもまた、日々を生きる原動力となり、その目標に向かって希望を抱いて進んでいけるのである。母親は、この学びの中で、《子どもの安定を促す関わり》を学び、子どもへの対応が変わる。【感情をコントロールしながら子どもに対応する】ことの必要性、重要性を学ぶ。母親は、子育てを、自分にとっての試練である、修行である、自分の仕事である、母としての責務である、と《自分にとっての子育ての意味》を見出したり、子どもとの日々を楽しいものにしたいたと《自分の気持ちをポジティブに切り替え》たりしようとする。また、《自分の感情を抑えて子どもに対応》したり、《内心の思いを隠して子供に望ましい対応》をしたりする。母親が、自分の感情を抑えて子どもに対応する、という努力を行うのは、感情的に子どもに接するよりも、母親が自身の感情をコントロールして子どもの感情に働きかけ、子どもにとって望ましい対応をした方が、子どもの安定を促し、かつ安定を維持することにつながり、さらには子どものやる気を引き出し、適切な行動の学習につながりやすいことを実感しているからである。そしてそのことが、子どもの成長につながり、この積み重ねが、子どもの生き抜く力につながると信じるからである。子どもの行動問題が減り、適切な行動に導きやすくなれば、《子育てが楽になったと感じる》。そして《子どもに余裕を持って対応できるようになる》。母親は、《子どもの学習能力の向上》、子どもの《心が育まれ優しい子になる》 実感を得て喜びを感じる。さらに、母親は、自分自身の変化、子どもの変化を感じ、《母としての自尊心がよみがえる》。この【変化する喜びを感じる】ことが、さらなる子育ての原動力となり、子どもの未来を信じ、願う力

となり、母親は、「発達障害のある子どもを社会化させ、心を育む」という大仕事を営むのである。

#### IV 考察

本研究では、発達障害のある子どもを育てる母親を対象に、子どもとの関わりにおける母親の感情体験を「感情労働」の視点から明らかにすることを目的とし、【子どもの未来を願う】【のしかかる負担に苦しむ】【喪失の痛みを抱える】【自分の感情をコントロール出来ない】【自分のコンディションを整える】【我が子に合った子育てを学ぶ】【自分の感情をコントロールしながら子どもに対応する】【変化する喜びを感じる】の8つのカテゴリーを含むモデルを最終的に提案した。発達障害のある子どもを育てる母親は、子どもの特性に合わせた育児スキルとして、自らの感情のコントロールを身につけ実践していることが示された。これは、母親自身の感情を用いて子どもの感情に働きかける労働であり、「感情労働」であると考えられる。

##### 1. 先行研究との比較による理論的位置づけ

本研究において、母親が子どもに対して“冷静に”“笑顔で”“ポジティブに”対応しようと心がけ、自分の気持ちをポジティブに切り替えようと、自分の感情をコントロールしている様子が見られた。また、自らの感情をコントロール出来ずに、内心の苛立ちや怒りを子どもに向けてしまうと、子どもに対する申し訳なさ、母としての自分の不甲斐なさを感じ、罪悪感に苛まれる様子も見られた。Hochschild (1983) は、「家庭は、人が自由に自分自身でいることができる場所と考えられているが、子どもに対する親の感情義務を静かに強制している場所でもある」と述べている。さらには、「親と子どもの関係について、内なる望ましい顔をアンビバレンスの上に被せるという水面下の作業が重視され、つながりが深くなればなるほど感情作業は多くなり、そのことにますます気付



かなくなる」とも述べている。感情労働を考える上で重要な概念として、感情規則 (Feeling Rule) がある。感情規則とは、特定の状況においては特定の心的状態になるはずであるという、ある集団において自明視されている感情労働の基本概念となるものである (安部・大蔵・重本, 2011)。本研究において、母親は、母親として優先すべきは、自分の心の内に湧き上がる感情ではなく、子どもの安定、子どもの成長を促す関わりである、というあるべき母親像を抱いていることが示された。発達障害のある子どもを育てる母親は、子どもの特性に合った関わり方として示される感情規則に加えて、母親としての望ましきへの適応や、個々のパーソナリティによって、母親自身が独自の感情規則を形成しているものと想定される。

また、Hochschild (1983) によると、感情の管理には2つの方法がある。一つ目の方法は表層演技 (Surface Act) と呼ばれ、実際に抱いた感情を抑制し、あるいは別の感情を抱いているかのように振る舞うことによって、自分の外面的な感情表出の仕方を変える方略である (Hochschild, 1983)。本研究において母親が、特に子どもの問題行動場面において、心の内に生じる苛立ちや怒り、恥ずかしさ、悲しみといった自己の感情を抑え、子どもの安定を促し、問題行動が早く収まるようにと、冷静を装いながら、穏やかに、短い言葉で子どもに接していることが示された。また、子どもの問題行動場面以外でも、子どものやる気を引き出したり、子どもの気持ちを持ち上げようと、子どものために明るく振る舞ったり、大げさに子どもを褒めたりという行為も見られた。生成されたカテゴリの中で、【自分の感情をコントロールしながら子どもに対応する】の中の、《自分の気持ちをポジティブに切り替える》に含まれる〈子どものために明るく振る舞う〉は表層演技に対応する。母親は、子どもの気分が良くなるように、また、子どもの心の安定のためにと、母親自身の気持ちに関わらず、子どものために意識し

て明るく振る舞うことがある。また、子どもの望ましい行動を強化するという目的を持ち、子どもにプラスのフィードバックをして、意識して子どもを褒めることを行なっている母親もいる。伊佐 (2009) は、教師の感情労働の戦略的な側面を明らかにし、感情そのものを変化させるわけではないが、子どもの心に働きかけるために表情や声のトーンを装うということを教師はよく行なっていることを指摘し、これはHochschildのいう表層演技にあたる「教育的演技」であると述べている。発達障害のある子どもを育てる母親は、本研究の【我が子に合った子育てを学ぶ】のカテゴリでも示されたように、療育の教えを家庭に取り入れ、母親が療育者の役割を担う場面も多い。このカテゴリの中の、《心の安定を促す関わり》は、伊佐 (2009) の言う表層演技である「教育的演技」であり、母親は、教師同様に、戦略的な感情労働を行なっていると考えられる。また、《自分の感情を抑えて子どもに対応する》に含まれる3つの概念、〈苛立ちを抑えて子どもに対応する〉、〈言いたいことを抑える〉、〈子どもを責めたい思いを呑み込む〉の3つの概念も、子どもへのネガティブな気持ちを抑制して、その場に望ましく振る舞う表層演技に対応するといえる。この場合も、Hochschild がフライトアテンダントの観察から導き出した結果同様、抑制されるべきは怒りであり、笑顔や明るさは歓迎されるものとして捉えられている。《内心の思いを隠して子どもに望ましい対応をする》に含まれる〈内心の思いに関わらず子どもに適切な行動を取ろうとする〉、〈子どもに苛立ちを気づかれないように気遣う〉、〈子どもに合わせざるを得ない〉、〈落ち着いて冷静に対応する〉もまた、苛立ちや動揺を消去・抑圧すべきものと捉えて、ネガティブな感情を抑制する表層演技を用いた感情管理である。子どもの感情に働きかけ、子どもの心を安定に導くことを狙いに行っている。

感情の管理の二つ目の方法は深層演技 (Deep

Act)である。深層演技とは、望まれる感情を実際に抱くべく、自分の感情を操作することである (Hochschild, 1983)。本研究においては【自分の感情をコントロールしながら子どもに対応する】の категорияに含まれる、《自分にとっての子育ての意味》、および同カテゴリの《自分の気持ちをポジティブに切り替える》、《落ち込んだ気持ちを切り替える》、《子どものためにできることをしようと思う》、《ポジティブを心がける》が深層演技に対応していると考えられる。母親は、落ち込む気持ちを抱きながらも、子どもの未来を思い、出来る限りのことをしよう、自分の感情を前向きに変えていこうとしている様子が見られた。《自分にとっての子育ての意味》に含まれる《試練》、《修行》、《仕事》、《母としての責務》は、子育てが自分にとってどんな意味があるのかと意味づけをすることで、自分の気持ちを奮い立たせて子育てに向き合っている様子を示している。これは、Hochschild (1983) が述べる感情作業の技法である認知的技法であり、自分の感情状態を変えるために、自分のもつイメージ、理念、思考を変化させることを目指す深層演技と一致している。先行研究同様、本研究でも、【のしかかる負担に苦しむ】というカテゴリが生成され、発達障害のある子どもを育てる母親が抱える負担の重さが明らかになった。この困難多き日々を生きるためには、そこに意味づけをして、困難に対する捉え方を変化させる必要があると考えられる。

一方、Hochschild (1983) は、「深層演技によって、表情と感情が分離すると、労働者には一種の心理的な緊張状態が生じる」と述べている。このように、感情労働場面において演技を行う中で、自身の感情とその表現との齟齬や分離を継続させた結果として生じる感情的な葛藤は、感情的不協和 (emotional dissonance) と呼ばれている (関谷・湯川, 2014)。感情的不協和は、バーンアウトにおける情緒的消耗感や脱人格化との強い関

連が明らかにされている (荻野・龍ヶ崎・稲木, 2004; Zapf, Seifert & Schmutte, 2001) ほか、職務満足感の低下や離職意思の増大に対しても、大きな影響力を持つことが指摘され (Bono & Vey, 2005)、感情労働における特に強いストレスサーとして扱われることが多い。本研究では、子育てにおけるストレスフルな状態を示すカテゴリとして【自分の感情をコントロールできない】というカテゴリが示された。母親は、日々の子どもの関わりの中で、母親自身の感情をコントロールして子どもに接する重要性、必要性を分かっているが、感情をコントロール出来ない状態に陥る。このような状態に陥る理由として考えられることは、子どもの特性による日々のストレスはもちろんのこと、【喪失の痛みを抱える】のカテゴリで示されたように、発達障害のある子どもを育てる母親が抱える、処理しきれない喪失の痛みによることも推察される。母親は、思い描いていた子どもとの日々と現実とのギャップ、他児との成長の違いに落胆し、我が子が障害児であることを認識する度に、悲しみを経験していることが示された。母親の喪失体験については、Klaus & Kennel (1982) が、我が子に先天性障害があると知る親たちの反応を「悲嘆の過程」として説明し、「期待していた「健康な子ども」の喪失」、「普通の子どもの喪失」という一つの喪失の過程であると述べている。一方、本研究においては、母親自身についても、《こうあったかった母親像の喪失》というカテゴリが生成され、障害特性からくる子育ての難しさにうまく対応できず、思い描いていた母親像を喪失していることも示された。

以上より、発達障害のある子どもを育てる母親は、思い描いていた子どもとの日々、未来像を喪失し、その喪失の痛み、悲しみを抱えながらこの感情を心の奥に押し込めて、子どもの前で明るく振る舞おうとしたり、苛立ちを抑えて子どもにとって望ましい対応をしようとしたりと努力していることが示された。これは、自身の感情をコント

ロールしながら、我が子の感情を変化させようとする感情労働をしている状態にあると考えられる。しかし、この葛藤の状態は、ダブルバインド（二重拘束）となり、表層演技の失敗をもたらす可能性があると考えられる。発達障害のある子どもを育てる母親が抱える、対象喪失の深い悲しみや切なさは、抑圧して隠せるようなものではなく、隠そうとしても隠しきれず滲み出る。それを子どもが感じ取り、子どもを混乱させてしまう危険性もある。発達障害のある子どもは、自分にとって最大の環境である母親の、抑えきれずに滲み出る感情を敏感に、繊細に察知しているのではないだろうか。母親自身が、処理しきれない、自身の抱える深い感情を意識化し、本当の気持ちを自己受容できるよう、専門家が母親を深く受容し、心理療法につなげていく事が重要である。

## 2. 発達障害のある子どもの母親の感情労働

Hochschild (1983) は、感情労働とは、「職務内容の一部としてクライアント（相手）に特定の精神状態を作り出すために、自分の感情を適切な感情状態や感情表現にする感情マネジメント」であると提起した。また、Ashforth & Humphrey (1993) は感情労働を「適切な感情を示す行為」と定義し、Zapf (2002) は「組織として望ましいとされる感情に自らの感情を調整する際に必要とされる心理過程」と定義している。片山・小笠原・辻・井村・永山 (2005) は「看護師の感情労働とは患者にとって適切であるとみなす看護師の感情を患者に対して表現する行為である」と定義している。Steinberg (1999) はHochschildの概念を拡張し、「感情労働の表現は演技でも本心でも構わない。感情労働はサービスを必要とする顧客を対象とするのみならず、同僚や上司、部下との関係性の中で発揮される労働である」としている。発達障害のある子どもを育てる母親の感情労働では、上記の定義に述べられている組織による管理体制はないが、母親のあるべき姿としての

社会通念、特性のある子どもに合った子育ての学びによって、一種の管理体制に似た状態が作られているともいえるだろう。

本研究における分析結果と上記の定義を踏まえて、ここでは、発達障害のある子どもを育てる母親の感情労働を「子どもの未来を信じ、子どもが生き抜く力をつけるために、子どもに対して適切な感情を示す行為である」と提起する。子どもの未来につながる感情労働を支えるために、支援者は、母親が抱える深い感情体験である対象喪失の痛みを理解し、母親自身がその感情に向き合い、乗り越えていくための支援を提供する必要がある。

## V. 研究の限界と、今後の研究への示唆

本研究では、母親の語りの内容から、先行研究で示されている感情労働概念に対応するカテゴリーが生成され、発達障害のある子どもの母親の感情労働の様相を示す事ができたといえる。しかし、いくつかの課題が新たに見えてきた。

第一には、調査対象についてである。今回の調査対象者は、わが子の障害に対して関心と理解を持って子育てに関わり、専門・非専門的なサポート資源を持っている方々といえる。しかし、現実には、サポート資源につながることなく、困難の多い子育てを一人で孤独に抱えている母親もいる。支援につながらず、発達障害のある子どもへの適切な関わり方を学べずにいる母親が、感情のコントロールができずに、苦しい日々を過ごしていることは容易に想像できる。それが昂じて、不適切な養育や虐待に至るケースもあると想定される。本研究で得られた感情労働の諸相を踏まえて、そうした母親への支援を探っていくことが必要である。また、本研究において、子どもの発達に違和感や不安を抱いてから、診断がつくまでの未診断時期に、母親が不安や辛さ、孤独感を抱えていたことが示された。支援につながりづらい未診断の時期に母親が背負う不安や負担の重さ、未診断時期特有の感情体験を理解し、支援につなげていく

必要がある。さらに、本研究では、子どもの知的水準、症状、社会適応の程度などに違いがあった。今後の研究では、子どもの状態像や障害の程度をアセスメントした上で、その程度によって、子どもと母親の関わり、母親の「感情労働」に差異があるかどうかを捉え、それぞれに応じた支援を構築する必要があると考える。

第二には、母親のみを研究対象とした点である。母親の語りの中に、子育てを共に営む父親、母親の支えとなる父親、時に母親の感情のはけ口となる父親など、父親についても多く語られたことから、父親もまた、発達障害のある子どもを育てる親としての感情労働を経験していると考えられた。また、きょうだい児についての語りもあり、きょうだい児に期待しすぎてしまうことや、我慢をさせてしまうことに心を痛めているという語りや、きょうだい児の存在が生きる支えになっているという語りもあった。父親やきょうだい児、祖父母といった、発達障害のある子どもと共に生きている家族それぞれの感情体験を捉え、その重なりやすれ違いを描くことができれば、より豊かな家族像が見えてくる。さらに、母親および家族の性格特性や発達の水準、心身の健康度のアセスメントを行い、それが感情労働を遂行するにあたりどのような影響があるかを検討する必要性が挙げられる。家族を取り巻く環境や状況、家族歴などの様々な要因もふまえ、個別ケースに対応できる支援が必要と考える。

以上の課題を踏まえて、本研究を基礎として、発達障害のある子どもの母親、そして家族の援助につなげていきたい。

<付記> 本稿は、平成30年度お茶の水女子大学発達臨床心理学コース修士論文を修正加筆したものである。貴重な子育て経験を語ってくださったお母さま方、本稿の執筆にあたりご指導を賜りました篁倫子教授に厚く御礼申し上げます。

## 文献

- 安倍 好法・大蔵 雅夫・重本 津多子 (2011). 感情労働についての研究動向, 徳島文理大学研究紀要, 82, 101-106.
- Ashforth, B.E., & Humphrey, R.H. (1993). Emotional labor in service roles: The influence of identity. *Academy of Management Review*, 18, 88-115.
- Bono, J. E. & Vey, M. A. (2005). Toward understanding emotional management at work: A quantitative review of emotional labor research. In C. E. Hartel, & W. J. Zerbe (Eds.), *Emotions in Organizational Behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 213-233.
- Erickson, R. J. (1993). Reconceptualizing family work: The effect of emotion work on perceptions of marital quality. *Journal of Marriage and Family*, 55, 888-900.
- Hochschild, A.R. (1983). *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. University of California Press. (石川 准・室伏 亜希訳 (2000). 管理される心 -感情が商品になるとき-, 世界思想社)
- 伊佐 夏実 (2009). 教師ストラテジーとしての感情労働, 教育社会学研究, 84, 125-144.
- 片山 由加里・小笠原 知枝・辻 ちえ・井村 香積・永山 弘子 (2005). 看護師の感情労働測定尺度の開発, 日本看護科学会誌, 25, 20-27.
- 木下 廉仁 (2003). グランデッド・セオリー・アプローチの実践 -質的研究への誘い-, 弘文堂
- Klaus, M.H. & Kennel, J.H. (竹内 徹他訳) (1985). 親と子のきずな, 医学書院
- 野邑 健二・金子 一史・本城 秀次・古川 徹・石川 美都里・松岡 弥玲・辻井 正次 (2010). 広範性発達障害児の母親の抑うつについて, 小児の健康と神経, 50(3), 259-267.
- 荻野 佳代子・瀧ヶ崎 隆司・稲木 廉一郎 (2004). 対人援助職における感情労働がバーンアウトおよびストレスに与える影響, 心理学研究, 75(4), 371-377.
- 関谷 大輝・湯川 進太郎 (2014). 感情労働尺度日本語版, 感情心理学研究, 21(3), 160-180.
- Steinberg, R. J. (1999). Emotional Labor in Job Evaluation: Redesigning Compensation Practices. *Annals of The American Academy of Political and Social Science*, 561(1), 143-157.
- 栢植 雅義・篁 倫子・大石 幸二・松村 京子 (2012). 対人援助専門職のための発達障害者支援ハンドブック, 金剛出版
- Zapf, D., Seifert, C., & Schmutte, B. (2001). Emotion work and job stressors and their effects on burnout. *Psychology and Health*, 16,

527-545.

Zapf, D. (2002). Emotion work and psychological well-being : A review of the literature and some conceptual considerations. *Human Resource Management Review*, 12, 237-268.